

タデ科イヌタデ属の一年生草本。在来種で全国の畑、水田の畔、荒地や道端など至る所で生育する。春の早い時期から出芽し、茎には軟毛が多く又無毛のこともある。ふつう赤紫色を帯び直立する。背丈は30cm～80cmになる。葉は互生する。短い柄があり長さ4～14cmの長楕円形～披針形で、先は長く尖る。幅0.5～2cm、濃緑色でしばしば表面中央部に黒い斑紋があるものが多い。この黒い斑紋があるからと言ってハルタデと決めつけることはできない。イヌタデにもオオイヌタデにもサナエタデにも黒い斑紋が見られることがある。

タデ類の同定で重要な識別の手掛かりとなるのが托葉鞘の形状である。托葉鞘というのは葉柄の基部が鞘状になって茎を包んでいる部分のことをいい、大きさや形状、外面の毛の有無、縁毛の有無や長さなどが種によって異なってくることで区別される。ハルタデの托葉鞘の形状を記述すると、膜質の筒状で外面に毛があり、縁毛は短く長さ1～2mm、ということになる。

早ければ4月に茎頂や葉腋に直立した3～5cmくらいの花穂を出す。花穂は総状花序で淡紅色あるいは白色の花を多数つける。花被は長さ2.5～3.5mmで5深裂する。蕾の時は濃紅色で開花すると淡紅色から白色である。果実は残った花被片に包まれたレンズ型または3稜形の瘦果。

ところで、「赤穂」という地名をご存じだろうか。全国には「赤穂」と名の付くところはいくつかある、あるいはあったようであるが、一番有名なのは兵庫県の「赤穂」で、忠臣蔵の物語で知られる赤穂事件の舞台の一つになった赤穂城のある市である。その赤穂市の中心部を千種川という清流が流れるが、その清流の河原一面に、そして海へ注ぐ海岸べりに赤い穂色の草が生えていたことから「赤い穂」と書いて赤穂となったという。

千種川の河原一面を覆っていたという赤い穂色の草が何であったのかが知りたいところである。すると、1727年に発刊された「播州赤穂郡誌」にこんな記載がある。「当郡海辺二生スル所ノ蓼ソノ穂赤ク四月ニ実ノル、他産ニナキ所ナリ、郡ノ名コレニ因テ名ツク」と。すなわち、海辺に生えるタデの花が赤く色づくのを郡の名に充てたということである。このタデの花は4月に実るということであるから、今の暦だと5月頃。5月

須藤 健一

頃に花が咲いて実るタデは何種類もあるが、例えば雑草として普通に見られる種で、花序を穂状に出すという種に限っても、4月頃から咲き始めるハルタデにサナエタデがある。また、イヌタデ、ヤナギタデ、オオイヌタデなども早ければ5月頃から花が咲き始める。ハナタデやニオイタデになると花期は7月、8月になる。

これらのタデ類の花色は、濃淡はあるがいずれも白色～淡紅色である。蕾の時と開花したときでは花色が違ってきたりするが、春の早くから花が咲き、しかもその色が紅色であるのはハルタデであり、ハルタデが地名の元になったのではと考えられる。しかもハルタデは4月頃から花が咲き始めるが、8月以降に開花する晩生型のハルタデもあり、4月から10月まで半年以上にわたって、千種川河川敷や瀬戸内の坂越の海の海岸沿いに赤い花穂が生育していたのである。それを見ていた当時の人たちが其の地を「赤穂」と名付けたのも無理からぬものであったと考えられる。



*Pennisetia maculosa* subsp. *hirticulis* var. *pubescens*